

# 法然法語の出典

——「つねに仰られける御詞」について——

## 【抄録】

法然の法語について、その文献の学問的な信頼性を確保しなければ、内容や教義解釈に問題が生じる。その作業の一環として、今回は「つねに仰せられける御詞」を取り上げた。法然の代表的な和語の教説として有名な法語であり、その内容の信頼性を確認するために、出典を探る作業を行なった。その過程では、そもそも「つねに仰せられける御詞」はどの法語を指すのか、ということについて考察し、結果、現存の文献で、確実に参考としたであろう出典を指摘した。また、存在したことは確実だが未発見の資料によるであろう出典の存在も確認した。

キーワード…法然、法語、法然上人行狀絵図、和語燈録

伊藤 真 宏

## 一、はじめに

法然（一一三三—一二二二）は、浄土宗の開祖として夙に有名であり、念仏の元祖として知られている。法然の思想は、その教義書『選択本願念仏集』をひもとくことによつて得られるが、他によつても法然の思想信仰を知ることができる。

特に祖師が誰かに向つて語つた言葉を「法語」と言うが、「法語」は『広辞苑』にも採録され<sup>1</sup>、日本古典文学大系にも『仮名法語集』という一冊があつて、一般的な用語として定着していよう。法然にも法語が存在する。一般的に、鎌倉時代においては、公的な文書は漢語で書かれていることが多く、日本仏教の祖師の教義書の多くは漢語形態であろう。一方、和語で伝承されている祖師のことばを「法語」と呼ぶことが多く、本稿でも「法語」と言えば和語で伝承された祖師の文献を指す。

法然の法語は、教義を信者に平易に語り、あるいは、手紙で法を説

き、また、弟子が師の言葉を聞き取りし、といったあらゆる形態で伝承されて今日、知ることができる。理論的に構築された難解な教義書では、理解されにくい場合、法語によって補完するといった機能が期待でき、その意味で法語の分析は重要なことであろう。

しかし、それらの多くは、対機要素が強く、教義書等と比して、必ずしも理論的な一貫性が保たれていない、と指摘される。また法然の和語文献でいえば、どの年齢で語られたものか、いつどのような場面、どなたに語られたものか、というような詳細が不明な場合もあって、その内容に問題が生じてくる。つまり今日的な学問水準から考えれば、法然の思想をひもとくといった場合、詳細な検証を俟たずに、無批判に和語文献を信頼しては、法然の思想解明に期待を持ってない、ということがある。

そういう観点から、和語文献、法然法語の詳細な検証をなす一環として、伝承された法語の典拠を明らかにし、典拠の関係性を見出しつつ、和語文献の信頼性を高めていくことを目指すものである。

本稿においては、『法然上人行状絵図』第二十一巻に収録される「つねに仰られる御詞」を取り上げ、出典の検討を試みる。

## 二、「つねに仰られる御詞」とは

『法然上人行状絵図』（以下『四十八巻伝』と略称）は全四十八巻の浩瀚な絵巻物で、法然の伝記はもちろん、法語、手紙、教義書の概要から、主な弟子の来歴まで、膨大な内容が含まれている。またそれ

ら内容に沿った絵が展開し、作成当時の服装や仏事の様式、風俗等も垣間見られ、学問的にも価値が高いと言える。法然百回忌の記念に伝記を集大成したとされる。この第二十一巻に「つねに仰せられる御詞」と題した法語が収められている。題が示す通り、法然が常に語ったであろう言葉であるが、例えば『選択集』というような、また『往生大要抄』のような、まとまった形で伝承されたものでなく、いつもことあるごとに口をついて話されたというべき短編の法語であり、しかし法然思想を端的に言い表しているために、収録せずにはおれない、そういった意図でわざわざ「つねに仰せられる御詞」という部分を設定されたということが読み取れる。

『四十八巻伝』は、詞書の章段の次に関連する絵を入れていて、詞書―絵―詞書―絵…という繰り返して構成される丁寧な構成である。詞書のひとまとまりを一段として区切り、それに関連の絵、となっており構成されている。

第二十一巻の構成は、

第一段 上人、常に仰せられる御詞

絵

第二段 一紙小消息

絵

第三段 法然、念仏行者の心得べき様を説く

絵なし

（章題は、浄土宗総合研究所編『現代語訳 法然上人行状絵図』

となっている。これだけで見れば、「つねに仰られける御詞」は第一の章段だけのように思えるが、これについては、研究者によっても見解が異なる。非常に煩雑だが、論述に必要と考え、第二十一巻全文を掲載してみよう（原文からの翻刻。便宜上、数字と句読点を付す。翻刻、句読点は筆者による）。

上人つねに仰られける御詞

1、上人の給はく、口伝なくして浄土の法門をみるは。往生の得分を見うしなふなり。其故は、極楽の往生は、上は天親龍樹をすゝめ、下は末世の凡夫、十悪五逆の罪人まですゝめ給へり。しかるを、我身は最下の凡夫にて、善人をすゝめ給へる文を見て卑下の心をこそして、往生を不定におもひて、順次の往生を得ざる也。しかれば善人をすゝめ給へるところを善人の分と見、悪人をすゝめたまへるところを是我分とみて、得分にする也。かくのこく見たためぬれば、決定往生の信心かたまりて、本願に乗じて順次の往生をとくるなり。

2、又云、念佛申にはまたく別の様なし。たゝ申せは極楽へむまるとしりて、心をいたして申はまいるなり。

3、又云、南無阿弥陀仏といふは、別したる事には思へからず。阿弥陀ほとけ、我をたすけ給へといふことは心えて、心にはあみたほとけをたすけ給へとおもひて、口には南無阿弥陀仏と唱るを、三心具

足の名号と申也。

4、又云、罪は十悪五逆のもの、なほむまると信して、小罪をもをかさしと思へし。罪人なをむまる、いかにいはんや善人をや。行は一念十念むなしからすと信して、無間に修すへし。一念なをむまる、いかにいはんや多念をや。

5、又云、一念十念に往生をすといへはとて、念仏を疎想に申すは、信か行をさまたくるなり。念々不捨者といへはとて、一念を不定におもふは、行か信をさまたくるなり。信を一念にむまると信し、行をは一形にはけむへし。又一念を不定におもふは、念々の念佛ことに不信の念仏になる也。其故は、阿みた仏は、一念に一度の往生をあてをき給へる願なれば、念ことに往生の業となるなり。

6、又云、煩惱のうすくあつきをもちへりみず、罪障のかろきおもきをも沙汰せず、たゝ口に南無阿弥陀仏と唱て、声につきて決定往生のおもひをなすへし。

7、又云、縦、餘事をいとなんとも、念仏を申しくこれをするとおもひをなせ。餘事をしゝ念仏すとは思へからず。

8、又云、往生をねかひ、極楽にまいらんことを、まめやかに思入たる人の気色は、世の中をひとくねり恨たる色にて常にはある也。

9、又云、人の命は食事の時、むせて死する事もあるなり。南無阿みた仏とかみて、南無阿みた仏とのみ入へきなり。

10、又云、法爾の道理といふ事あり。ほのをはそらにのほり、水はくたりさまになる。菓子のなかにすき物ありあまき物あり。これはみな法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は、名号をもて罪惡の衆生を

みちひかんとちかひ給たれば、たゞ一向に念仏たにも申せは、仏の  
来迎は法爾の道理にてうたかひなし。

11、又云、善導の尺を拝見するに、源空か目には、三心も南無阿弥陀  
佛、五念も南無阿弥陀仏、四修も南無阿弥陀仏なり。

12、又云、弘願といへるは、如大經説、一切善惡凡夫得生者、莫不皆  
乘阿弥陀仏大願業力為増上縁、と善導釈し給へり。予かこときの不  
堪の身は、ひとへにたゞ弘願をたのんなり。

13、又云、我はこれ烏帽子もきさる男也。十惡の法然房、愚痴の法然  
房が、念仏して往生せんと云いふなり。

14、又云、学生骨になりて、念仏や、うしなはんすらむ。

15、又云、本願の念仏には、ひとりたちをせさせて、すけをさゝぬな  
り。すけといふは、智慧をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道  
心をもすけにさし、慈悲をもすけにさす也。善人は善人ながら念仏  
し、悪人は悪人ながら念仏して、たゞむまれつきのまゝにて念仏す  
る人を、念仏にすけさゝぬとはいふなり。さりながら、惡をあらた  
め善人となりて念仏せん人は、仏の御心に叶へし。かなはぬ物ゆへ  
に、とあらんかゝらんと思ひて、決定心おこらぬ人は、往生不定の  
人なるへし。

16、又云、仏告阿難、汝好持是語持是語者、即是持無量寿仏名といへ  
り。名号をきくといふとも、信せずはきかざるかとし。たとひ信  
すといふとも、となへすは信せざるかとし。たゞつねに念仏すへ  
きなり。

17、又云、近来の行人、觀法をなす事なかれ。仏像を觀すとも、運慶

康慶かつくりたる仏ほとたにも觀しあらはすへからず。極樂の莊嚴  
を觀すとも、桜梅桃季の華菓ほとも觀しあらはさん事、かたかるへ  
し。たゞ、彼仏今現在世成佛、当知本誓重願不虛、衆生称念必得往  
生、の尺を信して、ふかく本願をたのみて、一向に名号を唱へし。  
名号をとふれば、三心をのつから具足するなり。

18、又云、往生の業成就は、臨終平生にわたるへし。本願の文、簡別  
せざるゆへなり。惠心の心も、平生にわたるとみえたり。

19、又云、他力本願に乗するに二あり、乗せざるに二あり。乗せざる  
に二といふは、一には罪をつくる時乗せず。其故は、かくのこつく  
罪をつくれは念仏申とも往生不定なり、とおもふ時に乗せず。二に  
は道心のおこる時乗せず。其故は、おなしく念仏申とも、かくのこ  
とく道心ありて申さんする念仏にてこそ往生はせんすれ、無道心に  
ては念仏すともかなふべからずと、道心をさきとして本願をつきに  
おもふ時乗せざるなり。次に本願に乗するに二の様といふは、一に  
は罪をつくる時乗するなり。其故は、かくのこつく罪をつくれは、決  
定して地獄におつへし。しかるに、本願の名号をとふれば決定往  
生せん事のうれしさよ、とよろこぶ時に乗する也。二には道心おこ  
る時乗するなり。其故は、この道心にて往生すへからず。これ程の  
道心は無始よりこのかたおこれとも、いまた生死をはなれず。故に  
道心の有無を論せず、造罪の輕重をいはす、たゞ本願の称名を念々  
相續せんちからによりてそ、往生は遂へきとおもふ時に、他力本願  
に乗するなり。

20、又云、せこにこめたる鹿も、ともに目をかけすして、人かけにか

へらす、むかひたる方へおもひきりて、まひらにゝくれは、いくへ人あれとも、かならずにけらるゝなり。その定に、他力をふかく信して、万事をしらす、往生をとけんと思へき也。

21、又云、称名のときに心に思へきやうは、人の膝などをひきはたらかして、や、たすけ給へ、といふ定なるへし。

22、又云、七日七夜心無間といふは、明日の大事をかゝしと今日はいむかことくすへし。

23、又云、人の手より物をゑんするに、すてに得たらんと、いまた得さると、いつれか勝へき。源空はすてに得たる心地にて念仏は申なり。

24、又云、往生は、一定と思へば一定なり、不定と思へば不定なり。

25、又云。念仏申さんもの十人あらんに、たとひ九人は臨終あしくて往生せずとも、われ一人は決定して往生すへし、と思へし。

26、又云。一丈のほりをこえんと思はん人は、一丈五尺をこゑんとはけむへし。往生を期せん人は、決定の信をとりあひはけむへきなり。

27、また云、いけらば念仏の功つもり、しなは浄土へまいりてなん。とてもかくてもこの身には、おもひわつらふ事そなきと思ぬれば、

死生ともにわつらひなし。

28、あるとき上人、あはれ、このたひ、しおほせはや、なと仰られけるを、乗願房うけ給て、上人たにかやうに不定けなるおほせの候はんには、その餘の人はいかゝし候へき、と申ければ、上人うちわつらひたまひて、まさしく蓮台にのらんまでは、いかてかこのおもひは、たえ候べき、とそなたまひける。

29、或人、上人の申させたまふ御念仏は、念々ことに仏の御こゝろに

かなひ候らん、なと申けるを、いかなれば、と上人かへしとはければ、智者にてをはしませは、名号の功德をもくはしくしろしめし、本願のやうをもあきらかに御心得あるゆへに、と申けるとき、汝、本願を信する事またしかりけり。弥陀如来の本願の名号は、木こり草かり菜つみ水くむたくひこときのものの、内外ともにかけて一文不通なるか、となふれはかならずむまると信して、真実にねかひて、常に念仏申を最上の機とす。もし智恵をもちて生死をはなるへくは、源空、いかてかかの聖道門をすてゝこの浄土門に赴へきや。聖道門の修行は智恵をきはめて生死をはなれ、浄土門の修行は愚痴にかへりて極楽にむまるとしるへし、とそおほせられける。

30、又人々後世の事申けるついでに、往生は魚食せぬものこそすれ、といふ人あり。あるひは、魚食するものこそすれ、といふ人あり。とかく論しけるを、上人きゝたまひて、魚くふもの往生せんには、鵜そせんする。魚くはぬものせんには、猿そせんする。くふにもよらす、くはぬにもよらす。たゝ念仏申もの往生はするとぞ、源空はしりたる、とそ仰られける。

31、上人御往生の後、三井寺の住心房の夢のうちにとはれても、念仏はまたく風情もなし。たゝ申よりほかの事なしと、上人答給ける。

32、又一紙にのせての給はく、末代の衆生を往生極楽の機にあてゝみるに、行すくなしとても疑へからず。一念十念に足ぬへし。罪人なりとても疑へからず。罪根ふかきをもきはし、との給へり。時くたれりとても疑ふへからず。法滅以後の衆生猶もて往生すへし、況



近來をや。我身わろしとても疑へからず。自身は是煩惱具足せる凡夫也、との給へり。十方に浄土おほけれど西方を願は、十惡五逆の衆生の生る故なり。諸佛のなかに弥陀に歸したてまつるは、三念五念にいたるまでみづから來迎し給故也。諸行のなかに念佛を用るは、彼の佛の本願なる故也。いま弥陀の本願に乗して往生しなむに、願として成せずといふ事あるへからず。本願に乗する事は信心のふかきによるへし。受かたき人身をうけて、あひかたき本願にあひて、おこしかたき道心を発して、離かたき輪廻の里をはなれて、生かたき浄土に往生せむ事、悦の中よろこひなり。罪は、十惡五逆の者も生ずと信して、少罪をも犯せしと思へし。罪人猶生る、況善人乎。行は、一念十念猶むなしからずと信して、無間に修すへし。一念猶生る、況多念哉。阿弥陀佛は不取正覺の言を成就して、現に彼國にまさは、定て命終の時は來迎し給はん。尺尊は、善哉我教にしたかひて生死を離、と知見し給ひ、六方の諸佛は、悦哉我証誠を信して不退の浄土に生、と悦給覽。天に仰、地に臥て悦へし、このたひ弥陀の本願にあふ事を。行住坐臥にも報すへし、かの佛の恩徳を。憑てもたのむへきは乃至十念の詞、信しても猶信すへきは必得往生の文也と。此書、世間に流布す。上人の小消息といへるこれなり。

33、上人、念佛の行者の心得へき様をおしへ給へる事あり。

a 所謂、われは阿みたをこそたのみたれ、念佛をこそ信したれ、とて、諸佛菩薩の悲願をかりしめたてまつり、法華般若等の目出たき經とをも、わろくおもひそしる事、ゆめくあるへからず。阿弥陀仏を信したればとて、よろつの佛をそしり、もろくの聖教をうたかひ

そしりたらんするは、信心のひかみたるにてあるへき也。信心たゝしからずは、阿みた佛の御心に叶まなければ、念佛すとも弥陀の悲願にもれん事は一定也。

b 又、罪をつくらしとつゝしみてよからむとするは、弥陀の本願をかりしむるにてこそあれ。又、念佛を多く申さんとして、日々に数遍のかすをつむは、他力をうたかふにてこそあれ、なといふ事の多ききこゆる、かやうのひか事ゆめくもちあるへからず。いつれのところに、阿弥陀佛は罪つくれとすゝめ給たる。これひとへにわか身に惡をもとゝめえす、罪をのみつくりゐたるまゝに、かゝるゆくちもなき虚言をたくみいたして、ものもしらぬ男女の輩をすかしほらかして、罪惡をすゝめ煩惱をおこさしむる事、かしなからこれ天魔のたくひ也、外道のしわざ也。往生極樂のあたかたき也と思へし。

又、念佛の数を多く申ものをは、自力をはけむといふ事、これ又ものも覚えす、浅猿しき僻事也。たゝ一念二念をとなふとも、自力の心ならん人は自力の念佛とすへし。千遍万遍をとなへ、百日千日よるひるはけみつとむとも、ひとへに願力をたのみ、他力をあふきたらん人の念佛は、聲聲念々、かしなから他力の念佛にてあるへし。されは三心をおこしたる人の念佛は、日々夜々時々尅々に唱れとも、かしなから願力をあふき他力をたのみたる心にて唱居たれば、かけてもふれても自力の念佛とはいふへからず。

c また、三心と申事は、その子細をしりたる人の念佛に三心具足せん事は左右に及はす。つやく三心の名をたにもしらぬ無智の輩の念佛には、いかてか三心具し候へき、と申す人も候やらん。これは

返々ひか事にて候也。たとひ三心の名をたにもしらぬ無智の者なれとも、弥陀のちかひをたのみたてまつりて、すこしもうたかふ心なくして、この名号を唱れば、この心か即三心具足の心にてあるなり。されは、只ひらに信してたにも念佛すれば、三心はをのつから具する也。されはこそ、よに浅猿しき一文不通の輩のなかに、一すちに念佛するものは、臨終正念にして目出き往生をはすれ。これ現証あらたなる事也。露ちりも疑へからず。中々よくもしらぬ三心沙汰して、あしさまに心得たる人々は、臨終も思やうならぬ事おほし。それにて誰々も心得へき也。

d 又、ときく別時の念佛を修して、心をも身をもはけまし、とゝのへすゝむへき也。日々に六万遍七万遍を唱へは、さても足りぬへき事にてあれとも、人の心さまはいたく目なれ耳なれぬれば、いらゝとすゝむ心すくなく、あけくれは忿々として心閑ならぬ様にてのみ、疎略になりゆく也。その心をすゝめんためには、ときく別時の念佛を修すへきなり。しかれば善導和尚もねんころにはけまし。惠心の先徳もくはしくをしへられたり。道場をもひきつくりひ、花香をも備たてまつらん事、たゝちからのたへたらんにしたかふへし。又、我身をも、ことにきよめて道場に入て、或は三時或は六時なるとに念佛すへし。もし同行なんとあまたあらん時は、かはるくいりて不断念佛にも修すへし。かやうの事は、おのくやうにしたかひてはからふへし。

善導和尚は、月の一日より八日にいたるまで、或は八日より十五日にいたるまで、或は十五日より廿三日にいたるまで、或は廿三日

より晦日にいたるまで、と仰られたり。面々指合さらん時をはからひて、七日の別時を常に修すへし。ゆめくすゝろ事ともをいふものにすかされて、不善の心あるへからず。

e 又、いかにもく臨終正念に安住して、目には阿みたほとけをおかみ、口には弥陀の名号をとなへ、心には聖衆の来迎を待たてまつるへし。としころ日ころいみしく念仏の功を積たりとも、臨終に悪縁にもあひ、最後にあしき心もおこりて、念佛の心行をも退しぬるものならば、順次の往生しはつして、一生二生なりとも、三生四生なりとも、生死のなかれにしたかひて、出離の道にとゝこぼらん事は、まめやかに心うく、口惜き事をかし。されは善導和尚の御すゝめには、願弟子等、臨命終時、心不顛倒、心不錯乱、心不失念、身心無諸苦痛、身心快樂、如入禪定、聖衆現前、乗佛本願、上品往生、阿彌陀佛国、とねんごろに発願せよと、の給へり。いよく臨終の正念をはいのりもし、ねかふへき事なり。臨終の正念をいのるは、弥陀の本願をたのまぬものぞ、なんと申人は、善導にはいかほとまさりたる学生そと思へし。あなあさまし、おそろしく。

f 又、念佛は常にをこたらぬが一定往生する事にてあるなり。善導すゝめての給はく、一発心已後、誓畢此生、無有退転、唯以淨土為期。又云、一心專念弥陀名号、行住坐臥、不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故といへり。かやうにすゝめましくたる事は、あまたおほけれども、ことくにかきのせかたし。憑へし仰へし。ふかく信へし。更に疑事なかれ。

g 又まことしく念佛を行して、けにくしき念佛者になりぬれば、よ

ろつの人を見るに、みなわか心にはおとりて、浅猿しくわろければ、我身のよきまゝに、我はゆゝしき念佛者にてあるものかな。誰々にも勝たりと思也。この心をはよくつゝしむへき事也。世もひろう、人も多ければ、山のをく林のなかにこもりゐて、人にもしられぬ念佛者の、貴く目出き、さすかに多くあるを、わかきかすしらぬにてこそあれ。されはわれほとん念佛者よもあらしとおもふ、僻事也。

この思は大驕慢にてあれば、即三心もかくる也。又それをたよりとして、魔縁のきたりて往生を妨くる也。これ我身のいみしくて、罪業をも滅し、極楽へもまいる事ならはこそあらめ。ひとへに阿みた仏の願力にて、煩惱をものそき罪業をもけて、かたしけなく手つからみつから、極楽へむかへとりて帰らせまします事也。我ちからにて往生する事ならはこそ、われかしこしといふ慢心をはおこさめ。驕慢の心たにもおこりぬれば、心行かならずあやまる故に、たちどころに阿弥陀ほとけの願にそむきぬるものにて、弥陀も諸佛も護念し給はす。さるまゝには悪鬼のためにもなやまざる也。返々もつゝしみて、驕慢の心をおこすへからず。あなかしこく、とねんころにをしへをき給へり。ふかく上人教誡の詞を信して、敢て本願にほころおもひなく、往生の前途を遂へきものなり。

これらのうち、岸信宏は27までを「つねに仰せられける御詞」とし、藤堂恭俊は31までを「つねに仰せられける御詞」と見る。本文の書き出しが、1のみ「上人の給はく」で、その後27までは「又云」であり、28以降「或時上人」などと書き出しの様子が変化する。つまり岸は、

一貫して「又云」で連続するところまでを「つねの仰せ」と見たわけである。藤堂は『四十八巻伝』の構成全体を考慮したようで、一段につき関連の絵、ということを意識すれば、31までが「つねの仰せ」と見る藤堂の見解が自然であるとも思えるが、岸説、藤堂説、それぞれに納得させられる。

筆者は、『四十八巻伝』の二十一巻については、それ全体が「つねに仰せられける御詞」であると見たい。理由は、二十一巻の冒頭に「つねに仰せられける御詞」と題されていることによる。

『四十八巻伝』は先述の如く、法然の法語が膨大に収録されるが、それまでにさまざまな形態で伝承されているものを集大成したもので、先行する法然法語文献、すなわち、『和語燈録』『西方指南抄』『法然上人伝記』<sup>4</sup>を確実に参考に行っているであろうことは予測できる。しかし、『四十八巻伝』は、出典を明記しないため、どの文献に依ったのか、ということは不詳である。特に「つねに仰せられける御詞」と題して伝承されるものは、それまでの三文献や伝記文献にはなく、『四十八巻伝』の編者が、様々な文献に繰り返し説かれる法語、法然の象徴的な用語を使用する法語、普段から誰にでも理解されやすい言葉で説かれる法語等を、法然が常に語っていたであろうという観点から断片的に抽出してひとまとめにしたと見られ、『四十八巻伝』オリジナルのジャンル分けである。しかも、『四十八巻伝』全巻を通して、このように巻頭に題が付されているのは、この巻のみである。

通常、『四十八巻伝』は、いずれの法語を収録する場合も、状況説明をして、説明の語りの流れの中で、法語の題目が紹介されてから本



文が引用されたり、状況説明から本文の引用、その後に「世に〇〇と言う」のような言い回しで法語名が紹介される。そういう全体的な『四十八巻伝』の文脈を模倣すれば、ここは、「上人、あるとき門弟や信者に語りて曰く」というような書き出しで始まり、いくらかの法語が引用されて、最後に、「これらは上人、常に門弟等に表示す法語なり。世に『つねに仰せられける御詞』というこれなり」等と結ばれることになるのが通常であろう。

確かに、詞書と絵という構成は、全体的な『四十八巻伝』の構成を根拠とすれば、第一段を「つねに仰せられける御詞」、第二段を「一紙小消息」、第三段を、後述するが「七箇条の起請文」とみることが自然である。しかし、第三段の書き出しと結びも、通常のパターンにはなっていない。

第三段の書き出しは、33に示した如く、「上人、念佛の行者の心得へき様をおしへ給へる事あり。」とあって、念仏行者の心得が説き明かされ、まさに念仏者に対して、「つねに仰せ」の御詞としてここに収録されたとしても矛盾を来さない。もし、藤堂の分類の如く、また『四十八巻伝』の通常のパターン通りで、この二十一巻が「つねに仰せられける御詞」「一紙小消息」「七箇条の起請文」の三つの法語を収録する意図があったなら、この第三段の結びは、「世に、七箇条の起請文と呼ばれるこれなり」となっている可能性が高い。しかしそうなのではないことから、やはり、二十一巻の冒頭に題する「つねに仰せられける御詞」の支配は、二十一巻全体に及んでいる、とみるのが正しいのではないだろうか。

### 三、出典について

繰り返すが、『四十八巻伝』は出典を明記しないため、編者が何を参考して「つねに仰せられける御詞」を選び、収録したのかは不詳である。しかしよく知られるものもあるので、それらが何に収録されているか調べ一覽してみた（出典表参照）。

まず一覽して言えることは、『和語燈録』の、特に「諸人伝説の詞」の影響が強いということであろう。

「諸人伝説の詞」は『和語燈録』第五巻に収録される法然の法語で、複数の門弟によって伝承されたものである。「諸人」とは隆寛、乗願、信空、聖光、禅勝、道遍の六師で、六師が伝承する法然の法語が収録されている。内訳は、隆寛一編、乗願三編、信空十編、聖光六編、禅勝七編、道遍一遍、計二十八編である。

了慧は、『和語燈録』編纂の際、伝承される法然の法語の真偽について一定の確認を行なったり、出典を明記する等、客観的に真作の法然法語を記そうとした姿勢が明確で、『和語燈録』の記述の信頼性は高い。出版され世に出回るのが元亨元年だが、成立の文永十二年は『四十八巻伝』の成立に先行する。

「つねに仰せられける御詞」と「諸人伝説の詞」で共通するものが十、『和語燈録』全体からのものを含めれば、実に十六の法語が共通する。また、『和語燈録』に収録されるものは、他の文献にも収録されることが多い。例えば2は『明義進集』、『一言芳談』にあり、4は良忠『浄土宗要集』『選択伝弘決疑鈔』等、5は良忠『浄土宗要集』

『一言芳談』等、11は『末代念仏授手印』、良忠『浄土宗要集』『決答授手印疑問鈔』『一言芳談』にある。これらの文献が、『和語燈録』と比していずれが先行するか、ということは問題にならない。「つねに仰せられける御詞」が何を参照したか、ということ一点で考えれば、『和語燈録』を参照していることは、ほぼ間違いないことであろう。何故なら、「つねに仰せられける御詞」の中で、『和語燈録』と共通するもの十六のうち、『和語燈録』以外に出典が認められないものが、10、15、25、33と四編存在するからである。このうち33は『和語燈録』第二巻所収の「七箇条の起請文」に該当し、パラレルな文献である。もし七箇条を解体して七編の法語とするなら、都合、「つねに仰せられける御詞」は三十九編で構成され、そのうち十編は『和語燈録』以外には見出せないものとなる。<sup>5)</sup>つまり、『四十八巻伝』の編者は、これら十編については、『和語燈録』でしか見ることができないのである。よって『四十八巻伝』の編者は『和語燈録』を参考していることは間違いないまい。

さらに気づかされることは、先行文献でありながら、『西方指南抄』と『醍醐本』からの引用が少ない点である。『醍醐本』については、むしろ全く参照していないと断言できる。ただ、12と17と18については、『西方指南抄』にしか見られないものであり、興味深い。ともに「十七条法語」と呼ばれるもので、現資料からみれば、『西方指南抄』を参照したと言えよう。ちなみに、2も「十七条法語」にあるが、様々な文献に引用される法然の法語であり、よく知られたものといえる。<sup>6)</sup>4と6も『西方指南抄』所収の法語であるが、いずれも有名な法

語であって、様々な文献に引用されている。よって、12、17、18が「十七条法語」でしか見られないということは、『四十八巻伝』の編者は『西方指南抄』を参照したのではなく、「十七条法語」を参照したと言える。つまり、法然の伝記法語集として編纂された『西方指南抄』の一部を引用したのではなく、個別に流布または収集された法然の法語類の一つ、「十七条法語」から参照した、ということがいえるのではなからうか。

また、『一言芳談』『祖師一口法語』は異彩を放つ。『一言芳談』は法然や明遍を中心とする高野聖系の人々の法語集で、概ね法然と関わりのある人々の法語で形成されたもので、『祖師一口法語』もこれに近い文献である。<sup>7)</sup>出典表で明らかであるが、『一言芳談』にしか出てこない法然の法語の存在が確認でき、非常に興味深い文献である。『和語燈録』と重なるものも含めると九編、『一言芳談』のみしか確認できないものは三編、『祖師一口法語』のみが一編であり、現資料から言えることは、『一言芳談』『祖師一口法語』を参照したということである。

さらに、全く出典の確認できないものが、3、14、19、22、23、27、30の七編である。これらは、どこから法然の「つねの仰せ」として伝承されたものであろうか。残念ながら今のところ、確認する術はない。ただ、まだ見ぬ法然文献の存在が確認されている。<sup>8)</sup>例えば『明義進行集』とは別の、『〇〇進行集』または『進行集』と呼ばれる、法然の法語集もしくは遺文集の存在が考えられる。また「二十八問答集」「白川消息」「物語集」「念仏問答集」と呼ばれた法然の法語集の

存在が確かだが、未だ発見されていない。そういうものの中に「つねに仰せられる御詞」の原型がある可能性は高いであろう。

#### 四、むすび

愚論を展開してきたが、ひとまずまとめておく。

「つねに仰せられる御詞」は『四十八巻伝』第二十一巻全体にわたる題目である。つまり二十一巻全体が「つねに仰せられる御詞」であり、第一段で三十一編、第二段で一編、第三段は『和語燈録』の「七箇条の起請文」だが、それを一編とは見ず、七箇条を個別に一条ずつの「つねに仰せの詞」七編とみて、都合三十九編からなる。

『四十八巻伝』の編者は、その出典として何を参照したか、ということについて、『和語燈録』から二十二編、『西方指南抄』から三編、『一言芳談』から三編、『祖師一口法語』から一編、そして1の良忠『浄土宗要集』、16の伝記類、21の良忠『浄土宗行者用意問答』と、不明の七編となる。

今回の検証では、これらの指摘に留まるが、いずれにしても新資料の発掘が俟たれる。存在は確認できるが、未だ我々の目にしていない法然の法語集が存在するわけである。ただ、一つ、予測として言えることは、良忠の存在感は見逃せないということであろうか。1と21について、それが良忠の手になるものに拠っているということ、これは重要である。『和語燈録』が良忠の弟子の了慧編集ということも合わせて考えれば、やはり良忠による、法然法語の収集ということがあつ

たからこそ、「つねに仰せられる御詞」への結実となっていくと見られる。そのことを今後も注視していきたい。

#### 註

- (1) 「正法を説いた言語・語句・文章など。」2 「祖師・高僧などが仏の教えを平易に説いた文。和文体・漢文体の2種がある。」(『広辞苑』第六版、岩波書店) とある。
  - (2) 岸信宏稿「法然上人の常の詞に就いて」(昭和三十七年四月、臨川書店刊『法然上人傳の成立史的研究』第三卷(研究篇 所収))
  - (3) 藤堂恭俊稿「法然上人の常に仰せられる詞の伝承とその法然諸伝における役割」(平成八年八月、山喜房佛書林刊『法然上人研究』第二卷所収)
  - (4) 『和語燈録』は、法然の孫弟子である浄土宗三祖良忠(一一九一—一二八七)の弟子、了慧が編纂した法然の法語録で、文永十二年(一二七五)、に成立。了慧存命中の元亨元年(一二三二)に開版された。その、全巻そろった『和語燈録』の元亨版が龍谷大学に所蔵されている。元亨版は、開版が編者了慧の存命中であることや、版木の元になる本を了慧自身が老眼の目を拭いつつ書いたと跋文に記されていること、また成立の文永十二年が、師匠良忠の存命中であるなどを考慮すると、版本とはいえ、その文献的価値は高い。
- 『西方指南抄』は、親鸞自筆の写本が真宗高田派本山専修寺に所蔵される、法然の法語録。奥書から康元元年(一二五六)〜康元二年(一二五七)の書写ということが判明しており、『和語燈録』よりも先行する。成立の年次は確定されていない。専修寺の写本も親鸞自筆は認められているが、『西方指南抄』の編者については不明。
- 『法然上人伝記』は、醍醐寺三宝院で大正六年(一九一七)に発見された法然の伝記法語録(醍醐本と略称)。法然晩年の常在給仕の弟

子、源智作成とみられる。発見された写本は、江戸時代初期に当時の住持義演の書写したものだが、義演が書写に際して元にした本が、源智作成の原本に近いと考えられ、重要視される。成立も不詳で、『西方指南抄』との前後関係も不明だが、『和語燈録』に先行することだけは確実であろう。

- (5) 通常は、33を「七箇条の起請文」一編とみて、「つねに仰せられける御詞」は全三十三編。この中、『和語燈録』のみにしか文献が見出せないものは「七箇条の起請文」を数えて四編であり、その割合は一割超である。33を解体すれば「つねに仰せられける御詞」全三十九編中、『和語燈録』のみしか文献が見出せないものは十編で、実に四分の一となる。

- (6) 藤堂は、(3)の論文でこの法語を詳述している。

- (7) 丸山博正『一言芳談』における出家のあり方」参照（『印度学仏敎学研究』第二十一巻第二号）

- (8) 拙稿「『和語燈録』諸人伝説の詞について」参照（『浄土宗学研究』第三十九号）

（いとう まさひろ 研究員、仏敎学部准敎授）

	『和語燈録』	『西方指南抄』	醍醐本	その他	知恩院御法語
1	東宗要四(浄全十一)				
2	五「諸人伝説」一四(信空)	中本(十七条法語)		明義進行集二・一言芳談下・祖師一口法語	
3					
4	四「黒田聖人へつかはす御文」	下末		東宗要四(浄全十一)・決疑抄一・弘願本	前十
5	四「禅勝房にしめす御詞」	禅勝房		東宗要四(浄全十一)・一言芳談上・九卷伝	前十五
6	三「大胡消息」・一「往生大要抄」	下本		一言芳談・九卷伝・『四十八卷伝』二二「御消息」・拾遺和語中(和語六)「御消息」	前十一
7	一言芳談上				
8	一言芳談上				
9	一言芳談上				
10	五「諸人伝説」二六(禅勝)				前二十八
11	五「諸人伝説」一九(弁阿)			授手印(浄全十)・東宗要四(浄全十一)・決答鈔上・一言芳談上	
12	中本(十七条法語)				
13	五「諸人伝説」一五(弁阿)			西宗要四(浄全十)	
14					
15	五「諸人伝説」二五(禅勝)				前十四
16	四卷伝三・伝法絵下・九卷伝二上・琳阿本六				
17	中本(十七条法語)			前二十	
18	中本(十七条法語)				
19	前十九				
20	祖師一口法語				
21	浄土宗行者用意問答(浄全十)				
22					
23					
24	拾遺下(和語七)「御消息」・一「往生大要抄」			徒然草	前十一
25	五「諸人伝説」二三(禅勝)				
26	五「諸人伝説」一七(弁阿)			東宗要四(浄全十一)・一言芳談下・選択集秘抄2(浄全八)	
27	『四十八卷伝』二八				
28	五「諸人伝説」四(浄願)			閑享後世物語(統浄九)・一言芳談	
29	五「諸人伝説」一三(信空)			九卷伝三下	前三
30					
31	五「諸人伝説」一四(信空)			一言芳談	
絵					
32	四「黒田聖人へつかはす御文」	下末		東宗要四(浄全十一)・決疑抄一	前十
絵					
33	a 二「七箇条の起請文」				
	34 b //				
	35 c //				前十六
	36 d //				
	37 e //				前二十四
	38 f //				
	39 g //				前二十九